



平成20・21年度 埼玉県教育委員会 委嘱
平成20・21・22年度 上尾市教育委員会 委嘱

『特別支援教育の推進に関する研究』

平成21年5月

埼玉県上尾市立西中学校

佐々木 智美





研究主題

生徒一人一人の教育的ニーズに応じた
特別支援教育の推進

～分かる喜び 楽しさが感じられる 学校生活をめざして～

埼玉県上尾市立西中学校

- 埼玉県中央部に位置する上尾市、その中心上尾駅の西口に位置する。開発に伴い駅周辺のマンションをかかえ、生徒数も増加傾向にある。
- 全学年とも5クラス、特別支援学級4クラス、全校生徒数522名の中規模校。
- 今年、38年目を迎えている。



研究主題の設定

- 平成19年に4月、学校教育法の改正・施行を受け、特別支援教育への具体的な取り組みが各学校でスタート。
- 本校においては、平成18・19年度の2カ年間に渡り、生徒指導の研究に取り組み、その中で校内の特別支援教育の支援体制を整えてきた。
- そこで、校内における特別支援教育に対する支援体制を見直すとともに、一層強化を図り、その中で通常学級における特別支援教育の在り方とスクラム学級(特別支援学級)と通常学級の生徒間の交流教育及び共同学習についての研究に取り組むこととした。



研究のねらい

- (1)スクラム学級における教育支援を見直し整理する中で、通常学級における教育支援の在り方を検証する。
- (2)発達障害に対する理解を深め、適切な支援の在り方を考えるとともに、一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育を通して、困難さを・不自由さを感じる生徒への支援を行い、充実した学校生活を送れるスキルを身につけさせる。
- (3)交流教育及び共同学習を通して、一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援を行い、生徒がより発展的な活動に望めるようにする。学級集団としての適切な対応の仕方(スキル)を身につけるとともに、幅広い教育活動を実践していく。



研究仮説

特別支援教育の観点に立った生徒の実態把握を通して指導方法の工夫・改善を図り、一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育を行うことによって、個々の生徒が学習が分かるという喜びや学校・学級で生活する楽しさを味わうことができる。



3つの研究部会の設置

部会1：スクラム学級(特別支援学級)の教育課程の研究

部会2：通常学級における特別支援教育の在り方

部会3：スクラム学級と通常学級の交流教育及び共同学習の推進



部会1 スクラム学級に おける取り組み

研究のねらい

- スクラム学級における体験的学習の在り方の検討を通して、生活単元学習の見直し・整理を行う。

研究仮説

- 生活単元学習に体験的な学習を取り入れ、実際に活動する場面を多く設定することで、
より生徒の成長・変容を期待できる。



前年度の取り組み

- 2カ年間にわたる文科省委嘱『豊かな体験活動推進事業』を通して、生徒に必要な力を身につけさせる取り組み。...どのような力をつけさせたいか どのようなねらいのもと活動を設定していくのか
- 体験的学習『宿泊体験学習』『わくわくタイム』の実践と活動内容・計画の見直し...実際の取り組みを生徒の姿を通して見直し、次の取り組みの計画を立てる



具体的な取り組み

- 前年度までの実践記録をもとに、共通理解を図り、本年度の計画を立てる。
- 事例生徒の決定と生徒につけたい力を決め、事例生徒の変容を図る観点とする。
- つけたい力(体験学習によって培うことのできる力)とは、
コミュニケーションする力 自己表現する力
判断する力 社会生活をする力(社会スキル)
自ら意欲的に取り組む力



わくわくタイム、 宿泊体験学習の実践

(1) 雑草^{あらぐさ}作業所 (2) 大滝げんきプラザ
(3) 足利 ころもみ学園 の実践から以下の
点について見直しを行う。

- a. 生徒個々のようすと今後の課題についてまとめる
- b. 各活動の洗い出し
- c. つけたい力5項目との関連一覧シートの作成
- d. 5項目から全体・各活動の検証
- e. 事例生徒の課題から全体・各活動の検証



実践報告集から ころも学園

4. 活動の様子 (1) 科学体験 (ぐんまこどもの国)

10:00「こどもの国」に到着。まずは、児童館の中にある【サイエンスワンダーランド】で楽しみました。「人工衛星」「ミュージックモーメント・マシーン」「虹のキャンパス」など空気の風石、シャボン玉などを応用した科学の装置がたくさんあり、みんな興味深く楽しんでいます。【サイエンスワンダーランド】でひとしきり遊んだ後は、屋外に出発に向けています。「雷の音」の階段をどんどん登っていき、トンネル型の滑り台が下まで続いています。外が見えない階段のトンネル内を滑るので、「怖いよ〜」と半べその子もいれば、得意なチャレンジする子もいました。



【サイエンスワンダーランド】迷心力の体験、身長が変わる機、車のカットモデルなど、いろいろな科学装置を楽しむことができました。



「雷の音」の滑り台へくたくたくと滑っていき、出てくるとフラフラです。

中学生でも十分楽しめる遊具が、広大な土地にたくさんありました。



「雷の音」の滑り台が下まで続いています。



ころも学園では、「椎茸の原木運び」を体験することができました。山村での作業は、生徒たちにとっても、教師たちにとっても、初めての体験です。椎茸の原木は、思った以上に重いものもありました。この原木を担ぐだけでも大変ですが、原木を担いで山道を登れるのか、すぐに音をあげるのではないかと、心配されましたが、誰一人リタイアすることなく最後までやり遂げることができました。



1本でもなかなか重い原木ですが、ころもで働く人たちの中には、4、5本をひょいといじりだす人もいました。



葡萄畑の前でバスで林道を登っていくと葡萄の木が植えられた小高い山が見えてきました。さらに近づいて行くと山一面の葡萄畑が広がり、数珠の産物が点在していました。ここでは、おちに葡萄からワインを作る(ワイナリー)作業と椎茸栽培の作業を行っています。今回は、椎茸栽培の原木を運ぶ作業を体験させてもらいました。

葡萄畑の中の坂道を一列にならべて登っていきます。

やったー、ついに最後の一本になったぞー。



傾斜度約36度の山道を、椎茸の原木をかかえて登るのは大変な重労働でした。だんだん汗が吹き出し、動きがゆっくりになりながらも、「疲れてもがんばる」と全員が最後までやり遂げることができました。

ころも学園の人たちから「よくがんばったね」と励ましの言葉をいただきました。

実践報告集から

足利林業振興センター 他

(3) 宿泊体験学習 (足利市林業振興センター・巨石荘)

・足利市内からかなり奥へ入ったところ、奥の天然記念物にも指定されている『名草の巨石群』の入口に宿舎はありました。管理人も5時には帰ってしまうため、夕飯の支度、風呂、作園の準備などは自分たちでやらなければなりません。翌朝、薪木運びの作業で疲れた体でしたが、もうひと頑張りです。食事係、風呂係、シーツ係、レク係に分かれ、それぞれの準備に取り掛かりました。



・巨石荘の前で
普段は、林業の人たちが使用しています。管理人に挨拶、自己紹介を済ませ、係ごとに準備に取り掛かりました。



・夕食のメニューは、ご飯と野菜豆腐、ポテトサラダ、杏仁豆腐。食堂が狭いためみんなで夕食を作りました。よく働いたため、みんなすてい食欲でした。



・室内レクリエーション
レク係の皆さんでレクリエーション開始。オープニングは「嵐の土の歌」を熱演しました。



「サンハイゲーム」
「集合ゲーム」の後、「おおかみが来たぞ！」等々に盛り上がり上がりました。



一番盛り上がったのは、子供のころ遊んだ「花いちもんめ」。2グループに分かれ競い合いました。



お支度が終わると、食事係はすぐに朝食作りに取り掛かりました。



・朝の散歩
奥山を少し登っていくと大きな巨石がいくつも現れました。



・巨石群入口前で
神楽や片付けを素早く済ませ、次の見学場所へ向かって出発です。

(4) 社会科見学 (足尾銅山・富弘美術館)



・バスレク
・列車レストランでの昼食
・質疑応答いただきます。

足利市出発し、しばらくはレク係を中心にバスレクを楽しみました。渡良瀬川にそってバスで1時間半ほど行くと『列車レストラン渡良瀬』に到着しました。ここで早めの昼食をとり、渡良瀬渓谷をさらに登って『足尾銅山』へと向かいました。事前学習で『足尾銅山』のこと学習していたので、生徒たちも興味津々です。坑道内には「トロッコ列車」に乗って入っていきます。坑道内に入るとワーッと歓声が上がりました。トロッコを降り、坑道内見学、細くしめじめして独特の雰囲気です。途中、作業をしている様子を再現した人が、炭鉱で働いている様子をリアルに伝えてくれました。



楽しみにしていたトロッコに乗り込み、出発！



・いよいよ坑道内へ、真っ暗な坑道の入り口を見て大興奮！



・探検している様子がリアルに伝わってきました。

赤く色づいた美しい景色を見ながら、バスで来た道を少し戻ったところに『富弘美術館』がありました。星野富弘さんが描く姿を事前にビデオで視聴していたため、「どうして口でこんなに上手に描けるのだろうか？」と感心してばかりでした。見学の後、気に入った時の絵はがきをお土産に購入しました。

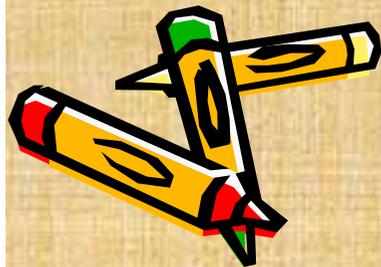


・足尾銅山・資料館の前で



・富弘美術館の前で

つきたい力一覽シート



事例生徒の行動観察の結果及び考察の例を記す。手順e

【宿泊体験学習】

行事名	宿泊学習（大滝・・・）に行こう			生徒名	
	コミュニケーションする力	自己表現する力	判断する力	社会生活する力	自ら意欲的に取り組む力
出発・入所・退所式	○	○			
レクリエーション	○	○			○
農業体験（江南）	○		△		○
夕食・朝食・昼食	○			○	
入浴				◎	
野外炊事	○		○	○	○
ハイキング			○		○
お土産の購入	○		○	○	○

【わくわくタイム2】

行事名	こころみ学園で仕事をしよう			生徒名	
	コミュニケーションする力	自己表現する力	判断する力	社会生活する力	自ら意欲的に取り組む力
開・閉校式、自己紹介	◎	○			
レクリエーション	◎	○			◎
ぐんまこどもの国1	○			○	○
ぐんまこどもの国2	○		◎	○	◎
こころみ湖水遊び	△		○		◎
巨石荘での保活動	○	○	○	○	◎
足尾銅山見学				◎	○
富弘美術館見学				◎	○
お土産の購入	○		○	○	○

*事例生徒の行動観察は、生徒の実態から考えて、

十分に力を発揮できた◎ ほぼ発揮できた○ あと一歩である△
とした。

—考察の例—

をみると、1学期の「宿泊体験学習」に比べて、2学期の「わくわくタイム」では、どの活動においてもその力を発揮していた。こころみでの活動時にコミュニケーションが△で

一覽シート記入例



次年度に向けての課題

事前・事後学習の検討...実践の具体的な方法を見いだすまでにかなりの時間を費やしていて事前・事後学習の段階にまで至っていない

生活単元学習との関わり...わくわくタイム、宿泊体験学習以外の体験的学習との関わりをどう設定するか

他の部会との連携...効率的に、より実践的に行うための工夫・連絡・調整の方法



部会2 通常学級における 特別支援教育の在り方

研究のねらい

- 校内における特別支援教育の支援体制を確立し、生徒一人一人の実態の把握に努め、『困っている(困難さ・不自由さ)』を感じている生徒に対して、一人一人の教育的ニーズに応じた支援を行う。



研究仮説

- ・『困っている(困難さ・不自由さ)』を感じている生徒に対して、教育的ニーズに応じた支援や必要なスキル教育を行うことで、授業への参加意欲や授業で分かる喜び、人間関係のトラブルを回避する能力を身につけ、学級での所属感を感じることができる。



前年度の取り組み

通常学級における特別支援教育とは

...特別支援教育のとらえ方

私たち教師が意識を変えること

...『困難さ』『不自由さ』を感じながら生活している生徒が
いる現状 どのようなとらえ方をしているのか

これまでの枠組みの中でできる実践を

...規律ある態度の育成を目指して、場に応じた立ち居振
る舞いを目的としたスキル教育の実践



具体的な取り組みとして

～気づきから支援へ～を基本的な考えに

- 支援を必要とする生徒に気づくための視点・気づく目をもつ。...講師陣による校内研修
- 実態を把握する手立て...生活実態アンケート、Q U調査による学級・学年の実態把握と分析
- 事例生徒の検討...教科担当者・学級担任による掌握
学年・校内委員会での検討



- 
- **支援を行う観点を明確にした支援の計画づくり**...総合的な学習の時間におけるスキル教育の年間指導計画としての位置づけ
 - **学習について困っている生徒への対応**
...TTによる教科指導、資料提示の仕方の工夫、授業間の共通の約束、発問の仕方や具体物の提示、適切な机間指導の方法
 - **望ましい学校生活を送るために**...生徒が身につけることが望ましい生活スキルの習得や具体的な学習支援の方法について研究成果から明確にする



- **スキル教育の授業実践による検証**...授業実践を重ね、対応の方法を検討。生徒への適切な言葉かけ、情報交換を行いながらの授業改善につなげる
- **社会性を育てるスキル教育**...社会性を育てるための体験活動の計画 事前学習におけるスキル教育の実施 体験や訪問等の実践活動を通じて、実社会で使える社会性スキルの習得



スキル教育の授業実践を通して ～ 特色ある体験活動～

- 1年社会体験活動

正しい言葉遣い あいさつの仕方 困ったときの対処の方法 人と接する上でのマナー 自分の意見の伝え方

- 2年JICA訪問

正しい言葉遣い 人との接し方 適切な質問の仕方 異文化・習慣を学ぶ

- 3年大使館訪問

正しい言葉遣い 日本の習慣と外国習慣とのちがい 異文化を意識した訪問マナー 質問の仕方と適切な言

言葉遣い



上手なコミュニケーション(学級活動)

ミスコミュニケーション
が生じるわけ



自分の意見を伝える (進路指導)

社会体験で学んだこと



資料提示の工夫(数学)

立体の
展開図



事例生徒学級による日常の 実践

コンセンサス
(合意)



成果と次年度への課題

- 自己の価値観に気づき、集団の中の個の位置づけを理解しつつある。周困とのトラブル回避能力が身につくつつある
- 教師間の情報の共有、支援を必要とする生徒への同一歩調での支援活動
- どの授業でも活用できる方法の検討
- 自己有用感を味わう一層の生活改善
保護者の理解と協力体制の確立



部会3 交流教育 及び共同学習

研究のねらい

- ・ 教師間・教師間・生徒と教師の間における交流の場を確認し、広げ、深めるとともに、スクラム学級生徒と通常学級生徒相互が学び合えるように内容の改善を図る。



研究の仮説

- 交流教育及び共同学習を推進することによって、それぞれの立場を理解し、思いやりの心を育み、共に生き、学ぶ事の喜びを味わうことができる。



前年度の主な取り組み

- 定期的な交流の場の設定
所属学級での交流給食 朝会・集会活動への参加 委員会活動 学校行事への参加
- 交流を続ける生徒のアンケート調査・分析
スクラム学級生徒の受け入れと、受け入れる側の通常学級の生徒の心の変容について、アンケート調査



具体的な取り組み

交流教育および共同学習の機会...委員会活動・交歓給食・体育祭・修学旅行・スキー教室・JICA・大使館訪問
生徒の状況把握 ...クラスや学年の状態(受け入れ態勢について・設定・サジェスション)

変容の視点(内容)...交流教育を行うことによって通常学級および特別支援学級の生徒がどのように変容していくか。(例)かかわり・言葉掛け・行動等

変容の指標(尺度)づくり...生徒の感想(自由記述)

アンケート項目の設定

(受け入れ方・見方・段階・対等性)



交流教育に関するアンケート



アンケート集計結果

1年生

交流教育に関するアンケート(2回目=10月上旬実施)

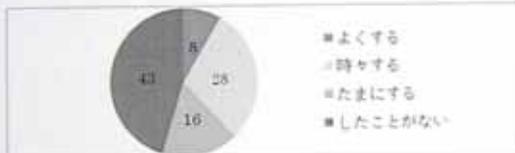
1 あなたのクラスは交流給食をしていますか

はい 9.5 (3クラス=1・4・5組) いいえ 6.4 (2クラス 2・3組)

2 交流給食でスクラムの生徒と話したことがありますか

	よくする	時々する	たまにする	したことがない	
1組	5	1.5	3	10	3.3
4組	2	8	7	14	3.1
5組	1	5	6	19	3.1
合計	8	2.8	1.6	4.3	9.5
	(8.4%)	(29.5%)	(16.8%)	(45.3%)	

前回に比べ、わずかに話す機会が増えている。



3 どんな話をしていますか

給食のこと 5人・自分のクラスのこと 5人・スクラムのクラスのこと 2人
 体育祭のこと 3人・クラスのリレーのこと 3人・テレビのこと 5人
 ゲーム 1人・休日何して遊ぶか 5人・兄弟や家族のこと 4人
 挨拶程度 4人・どうでもいいような話 10人・同じ小学校だった話 2人
 それなりにいろんな事を話題にしようとしていることが伺える

4 話をあまりしない理由

「席が遠い」「班が違う」 2.6人・話題がない 1.5人・
 何を話していいかわからない 5人・話題を考えすぎて話せない 2人
 話にくい 4人 など
 話しかけてもあまり応えてくれない・(自分が)話することが苦手

5 体育祭でスクラムの生徒がクラスの一員として参加した方がよいと思う理由

	とても楽しかった	楽しかった	あまり楽しくなかった	何も思わない
1組	1.6	9	0	8
2組	1.6	6	1	9
3組	1.9	5	0	8
4組	2.2	5	0	4
5組	2.4	2	0	5
全体	9.7	2.7	1	3.4
	(61.03%)	(17.0%)	(0.6%)	(21.4%)



6 体育祭で一緒に行った競技種目は、今後もっと増やした方がよいかどうか教えてください
 増やした方がよい このままでよい 減らした方がいい

	増やした方がよい	このままでよい	減らした方がいい
1組	4	2.9	0
2組	2	2.9	1
3組	2	3.0	0
4組	6	2.5	0
5組	2	3.0	0
全体	1.6	14.3	1
	(10.1%)	(89.9%)	(0.6%)

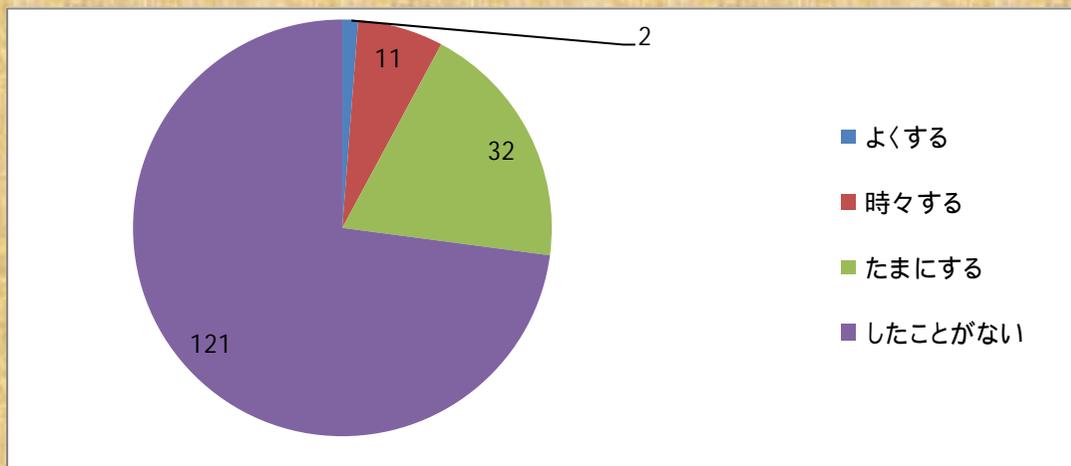


7 種目の増減についての種目と理由

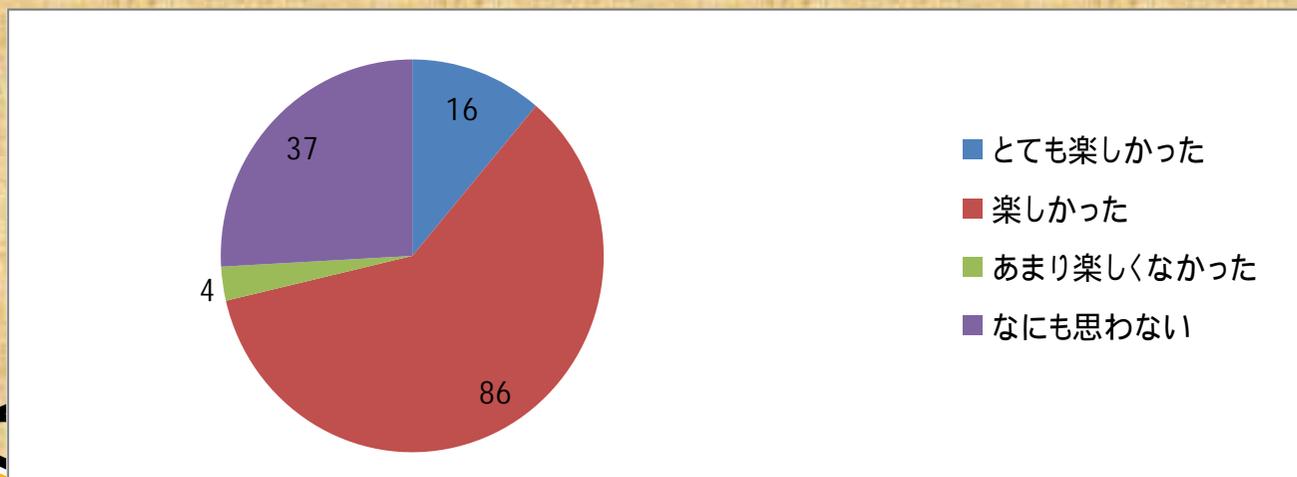
学年種目 楽しいから 3人
 クラスの一員だから 2人
 リレー クラスの一員だから 2人
 (種目未記入) 一緒に楽しむべきだ
 (種目未記入) 学年種目から

アンケートの集計結果

アンケート詳細 (旧2年生)



交流給食で
話をしたことが
ありますか



体育祭に
一緒に
参加して
どう思う

アンケート調査の考察

- 会話が少ないことに対して、座席の固定があげられた。座席を固定せず移動させることで、改善された。
- 会話の話題が見つからない。スクラム学級通信を通常学級教室に掲示、共通理解を図り改善。
- 体育祭「とても楽しかった」...クラスに偏り体育的技能・走力を認めている。日頃の鍛錬の成果を理解。



成果と次年度への課題

- アンケート調査を重ねることでスクラム学級と通常学級の生徒及び教師が互いに近づき、理解し合おうという姿勢が高まった。
- 見えない壁が取り払われてきた。
- 受け入れ側の状態を整えること、個々の生徒の状態を理解すること。
- スクラム担当と理解し合う場・確認する場を設けることが必要。



研究・実践の成果

- 『特別支援教育』とは何か、校内研修や各部会での論議を重ねる中で、特別支援を特別な視点で捉えるのではなく、これまでの教育活動の延長線上にあるものであることをとらえ直した。
- そうした中で発達障害に対する理解を深め、私たち教師が気づきの目を持ち、教育的ニーズに応じた適切な手だてを講じていくことがより強く求められていることもあらためて共通認識をすることができた。
- 一人一人を大切にしたり分かり易い授業実践は、特別に支援を必要とする生徒ばかりではなく、授業全体のスキルアップを図るものであり、教師の技量の向上や学級全体にも相乗効果を上げるものとなった。
- 授業実践を積み重ねの中からは、生徒にとって「分かる授業」をするためにはどのような手だてが有効なのか、生徒理解と共に教師一人一人が授業の構想をする力が少しずつではあるが向上してきている。
- 学級での生活を上手く送れない生徒も周囲との関わり方のスキルを学ぶことでトラブルを起こしにくくなったり、周囲の関わり方も混乱を避けるような関わりがもてるようになった。生徒の中からも「この授業を通して 〇〇が分かった」「〇〇ができた」という実感を持った感想も見られた。
- 本研究で目指している「一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育」とは、決して一人の生徒に対して向けられたものではなく、このことを通して学校全体に「分かる喜び」「楽しさ」が感じられる学校生活を送るといった形でできつつあると感じている。同時に私達の教師のさらなる授業技術の向上、教育相談・生徒指導的な生徒との関わり場面での人間関係づくりにも、影響を与えていることが確認できた。



次年度に向けて

- 課題研究を通して、本校が目指す生徒像『分かる喜び』『楽しさを感じる』生徒が生活アンケートの実施等により、育ち始めているという実感はある。
- 2年目に向かい、Q-Uによる生徒の継続的な観察と支援が、必要となる。
- 2年目の課題として検証を進めていく。今後の継続的な支援で生徒の変容をさらに観察を続けていく必要がある。
- 保護者の協力・理解が得られないケースもあり、保護者への資料提供をするための観察記録としての生徒の学校生活の様子について、または指導の経過について継続して書きためておくようにする必要もある。
- 生徒が「分かる喜び 楽しさが感じられる学校生活」を送れるような具体的な手だてを教師一人一人がさらに追究していく姿勢を持ち続けることが必要であり、それらを継続することによって生徒の一層の変容を促すことができるものとする。



生徒一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育の推進

一分かる喜び 楽しさ が感じられる学校生活をめざして

上尾市立西中学校

1 はじめに

本校は、平成20・21年度の2年間にわたり、埼玉県教育委員会、上尾市教育委員会、埼玉県特別支援教育研究会より特別支援教育の研究委嘱を受け、現在研究1年目を終えようとしている。本校での研究は、通常学級における特別支援のあり方を中心に、特別支援学級の教育課程、交流教育及び共同学習等の視点に立った内容で取り組んでいる。

2 研究主題設定の理由

本校では、昨年まで「生徒指導の研究」において、部会の一つに「特別支援教育」を置き、校内支援体制を整えてきた。本校にはスクラム学級（特別支援学級を指す）が設置されており、今年度は、スクラム学級における教育課程の研究を進めるとともに、通常の学級において「困っている」を感じる生徒・保護者の実態把握に努め、生徒一人一人の教育的ニーズに応じた支援の方法を確立していくことをねらいとした。授業実践を通して、「困っている」を感じる生徒が喜びや楽しさを味わうことができるように生徒一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援を行っていくための校内における支援体制の充実を目指した。

3 研究のねらい

(1) これまでのスクラム学級における教育支援を見直し整理する中で、通常学級における教育支援の在り方を再認識し、教師の指導技術の向上、指導の充実に向けた取り組みとする。

(2) 発達障害に対する理解を深め、適切な支援の在り方を考えるとともに、一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育を通して、困り感をもつ生徒への支援を行い、充実した学校生活が進めるスキルを身につけさせる。

(3) スクラム学級と通常学級における交流教育及び共同学習を通して、一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援を行い、生徒がより発展的な活動に臨めるようにする。また、学級集団としての適切な対応の仕方（スキル）を身につけるとともに、幅広い教育活動を実践していく。

4 研究の内容

(1) 「スクラム学級における特別支援教育」部会では、スクラム学級における教育課程の在り方を研究の中心に据え実践を行ってきた。生活単元学習・体験的な学習（わくわく・宿泊 他）を中心に、ねらいや実際の取り組み方について、生徒の変容を見ながら検証を行う。検証の結果を受け、ねらいや取組の見直し、

必要に応じて教育課程の再検討を行う。

(2) 「通常学級における特別支援教育の在り方」部会では、校内における特別支援教育の支援体制を確立し、生徒の一人一人の実態の把握に努め、「困っている（困難さ・不自由さ）」を感じている生徒に対して、教育的ニーズに応じた支援を行う。さまざまな授業実践を通して、その検証を重ねることで個々の生徒に応じた指導の充実を図る。

(3) 「スクラム学級と通常学級における交流教育及び共同学習」部会では、交流教育及び共同学習を推進することによって、それぞれの立場を理解し、生徒間に思いやりの心を育み、障がいがある、なしに関わらず共に生き、共に学ぶことの喜びを味わうことができる教育実践を行う。

5 研究・実践の成果

◇「特別支援教育」とは何か。これまでの教育活動の延長線上にあるものであることをとらえ直した。そうした中で発達障害に対する理解を深め、私たち教師が気づきの目を持ち、それぞれの教育的ニーズに応じた適切な手だてを講じていくことがより強く求められていることもあらためて共通認識をすることができた。

◇一人一人を大切にしたい分り易い授業実践は、特別に支援を必要とする生徒ばかりではなく、授業全体のスキルアップを図るものであり、教師の技量の向上や学級全体にも相乗効果を上げるものとなった。

◇授業実践を積み重ねる中から、生徒にとって「分かる授業」をするためにはどのような手だてが有効なのか、生徒理解と共に教師一人一人が授業の構想をする力が向上してきている。また、学級での生活を上手く送れない生徒も周囲との関わり方のスキルを学ぶことでトラブルを起こしにくくなり、周囲の関わり方も混乱を避けるような関わりがもてるようになった。

6 今後の課題

◇今後の継続的な支援で生徒の変容をさらに観察を続けていく必要がある。また、保護者への資料提供をするための観察記録としての生徒の学校生活の様子について、または指導の経過について継続して書きためておくようにする必要もある。

◇生徒が「分かる喜び 楽しさを感じられる学校生活」を送れるような具体的な手だてを教師一人一人がさらに追究していく姿勢を持ち続けることが必要であり、それらを継続することによって生徒の変容を促すことができるものとする。



今年度の方向性として

- 前年度までのスキル教育をそのまま継承して進めていく。これまでの流れ・計画の中で実施。
- 教科指導に役立つ手立てを西中の授業指導マニュアルとしてまとめていく。
- 日常の中のスキル教育の実践。

